

第3章 京都大学教養部構内 AO21 区の発掘調査

泉 拓良

1 調査の経過

本調査区は、京都大学教養部構内のほぼ中央、東大路通りに面した位置にある(図版1-91)。ここに実験排水槽を設置することになったため、昭和55年度に試掘調査を実施し、遺跡の確認と土層の観察をおこなった〔泉・浜崎81 pp.35-38〕。その結果、鎌倉時代の井戸を検出したので、設置予定地全域を発掘調査することにした。発掘調査は昭和56年2月20日に開始し、3月14日に現地説明会をおこなって、3月31日に現地作業を終了した。なお、現地作業は吉野治雄が担当し、整理は泉がおこなった。

2 層位

調査区は白川の形成した扇状地の西端に位置し、西に隣接する東大路通りの路面とのあいだに比高1mの段があるが、調査区の地表は平坦で、標高53.6mをはかる。層序は調査区全域で大きな変化はなく、地表から約1m下の黄砂(第5層)までのあいだに、4枚の堆積層が認められる(図11)。上から順に、表土(第1層)、黒褐色土(第2層)、赤褐色土(第3層)、黄茶褐色土(第4層)である。近世の遺構は黒褐色土を除去した段階で検出され、赤褐色土は中世の遺物を包含している。主要な遺構は、この赤褐色土下の黄茶褐色土上面で検出した。黄茶褐色土と黄砂が無遺物であることを確認して、発掘調査を終了した。なお、黄砂は周辺の発掘調査からみて、弥生前期末～中期初頭の堆積である。

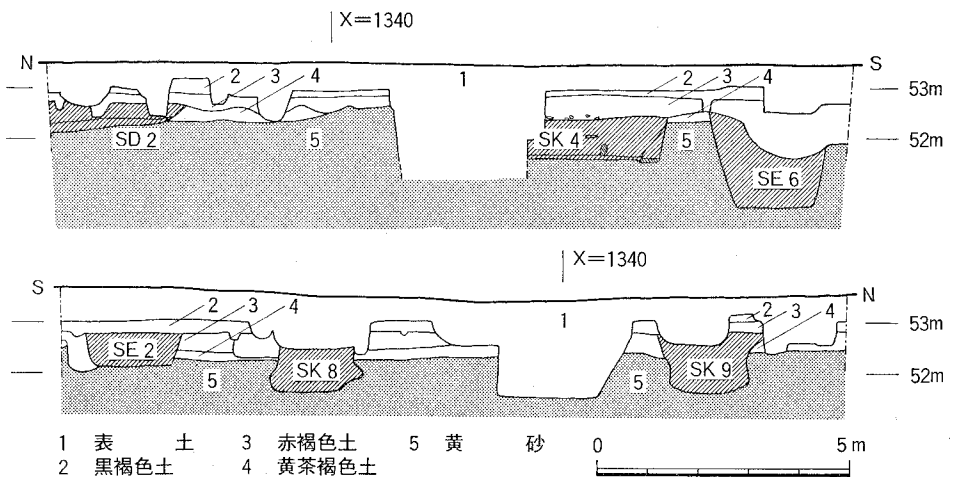


図11 調査区東壁(上)と西壁(下)の層位 縮尺1/150

3 遺 構

さきに述べたように、遺構は検出面の違いによって、近世と中世以前との2時期に分けることができる。近世の遺構は黒褐色土を埋土とし、野壺状の土坑 SE 1・SE 2 と柱穴とがある(図12)。柱穴は並びを確認できなかったので図示していない。中世以前の遺構には、溝、井戸、土器溜、土墳墓などがあり、以下で個々の遺構を説明する(図版7, 図12)。

溝 SD 2 幅3.4m, 深さ0.7mと幅広の溝で、調査区北東端から弧を描いて南西にめぐる。後述する SE 3 や SK 1 との切合い関係から13世紀を遡り、黒色の埋土からみて本調査区では最古の遺構と思われるが、出土遺物がなく、年代はさだかではない。

井戸 SE 6 調査区の東南部壁ぎわで検出したため、東の部分は不明であるが、一辺約2.5m の方形掘形の井戸になると思われる。深さは約2m, 井戸側や水溜めなどの施設は検出できなかった。埋土からは13世紀前葉の遺物が大量に出土している(図14)。

井戸 SE 3 調査区北端にある一辺3m の方形掘形をもつ井戸。深さ約2m で井戸底に達する。井戸底にはさらに、1m 四方で深さ1.5m の掘込みがあり、方形の木製井戸側が設置されている。この部分は水溜めにしては深く、井戸本体の可能性もある。埋土からは14世紀前葉の遺物がまとまって出土した(図15)。

土器溜 SK 1 SD 2 の上面で検出した。深さ0.3m で1.3m × 1.1m の楕円形土坑に、土師器皿・椀がまとまって完形のまま埋っていた(図版7-2)。遺物のほとんどが土師器の皿・椀という典型的な中世土器溜である。14世紀前葉の資料である(図15)。

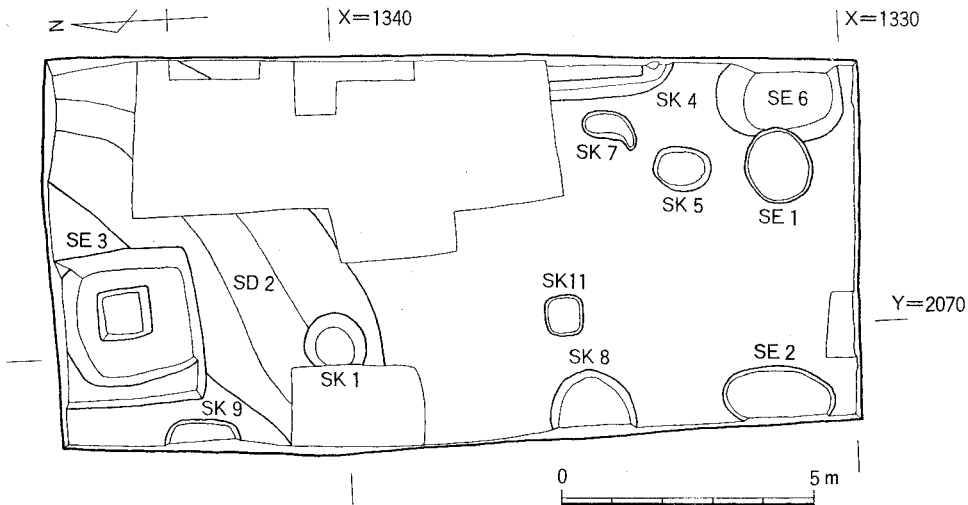


図12 検出遺構 縮尺1/150

土壙墓SK4 調査区東端で検出したため、遺構の西半を明らかにしただけである。長径が2.2mの楕円形掘形に、深さ0.6mで長辺が1.9mの長方形掘込みがある(図版7-3, 図13)。掘込み部からは、掘形とは異なり、22本以上の鉄釘や木炭がまとまって出土した。検出面下0.4~0.5mには礫があり、それ以下からは鉄釘の出土をみない。鉄釘は原位置を保ってはいないが、構造や規模は本部構内AT27区出土の土壙墓SK3と類似し〔五十川81 pp. 26-28〕, 土壙墓と考えた。灰白色を呈する土師器凹み底小型碗の完形品をはじめ、少量の遺物が出土し、本遺構の年代を14世紀中・後葉と決める。

土坑SK8・SK9 調査区西端で検出した一辺が約1.6mの袋状の土坑。西の部分は不明ではあるが、深さはSK8が0.8m, SK9が1.0mと深い。出土遺物は少ないが、14世紀中・後葉のものであり、SK4と同時期であることから、墓の可能性が強いと思われる。

SK5, SK7, SK11はごく浅い土坑であり、遺物もほとんど出土していないことからみて、自然の落込みであった可能性が強い。

4 遺 物

出土した遺物は整理箱に20箱分で、大部分が中世の遺物である。ここでは、良好な資料といえるSE6, SE3, SK1出土の遺物を、各遺構別に説明する。なお、14世紀中葉以降は若干の土師器が出土しているものの、その時期の中国製陶磁器はまったくみられず、本調査区の遺跡の推移を知る上で重要である。また、ほかの調査地点と異なって、軒瓦が1点も出土していないことも、注意すべき点であろう〔京大埋文研81b p. 11〕。

SE6(図版8・9, 図14) 出土遺物は残存率1/12以上の破片が約1,000点あり、口縁部計測法〔宇野81 pp. 61-62〕で完形品に換算すると163.7個体分になる。

土師器 大型の皿AⅠの口径分布は、14cmにピークがあり、13cmも少なくない(表1)。口縁部形態は1段撫で面取り手法D₅類(Ⅱ1~Ⅱ3)が主で、D₃類がそれに次ぐ。小型の皿AⅡは口径9cmのものが主で、口縁部形態はD₃類(Ⅱ5~Ⅱ7)と、D₅類(Ⅱ8~Ⅱ10)

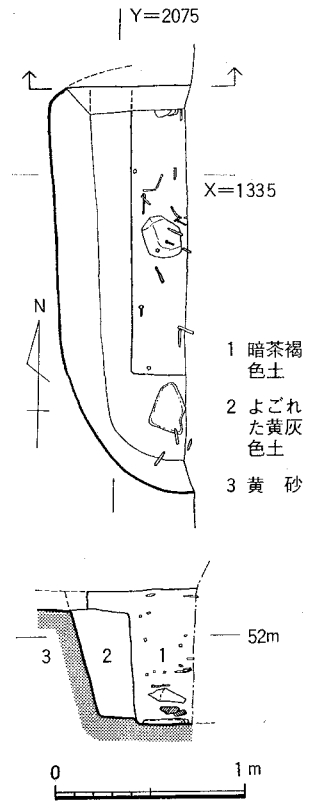


図13 土壙墓SK4
縮尺 1/40

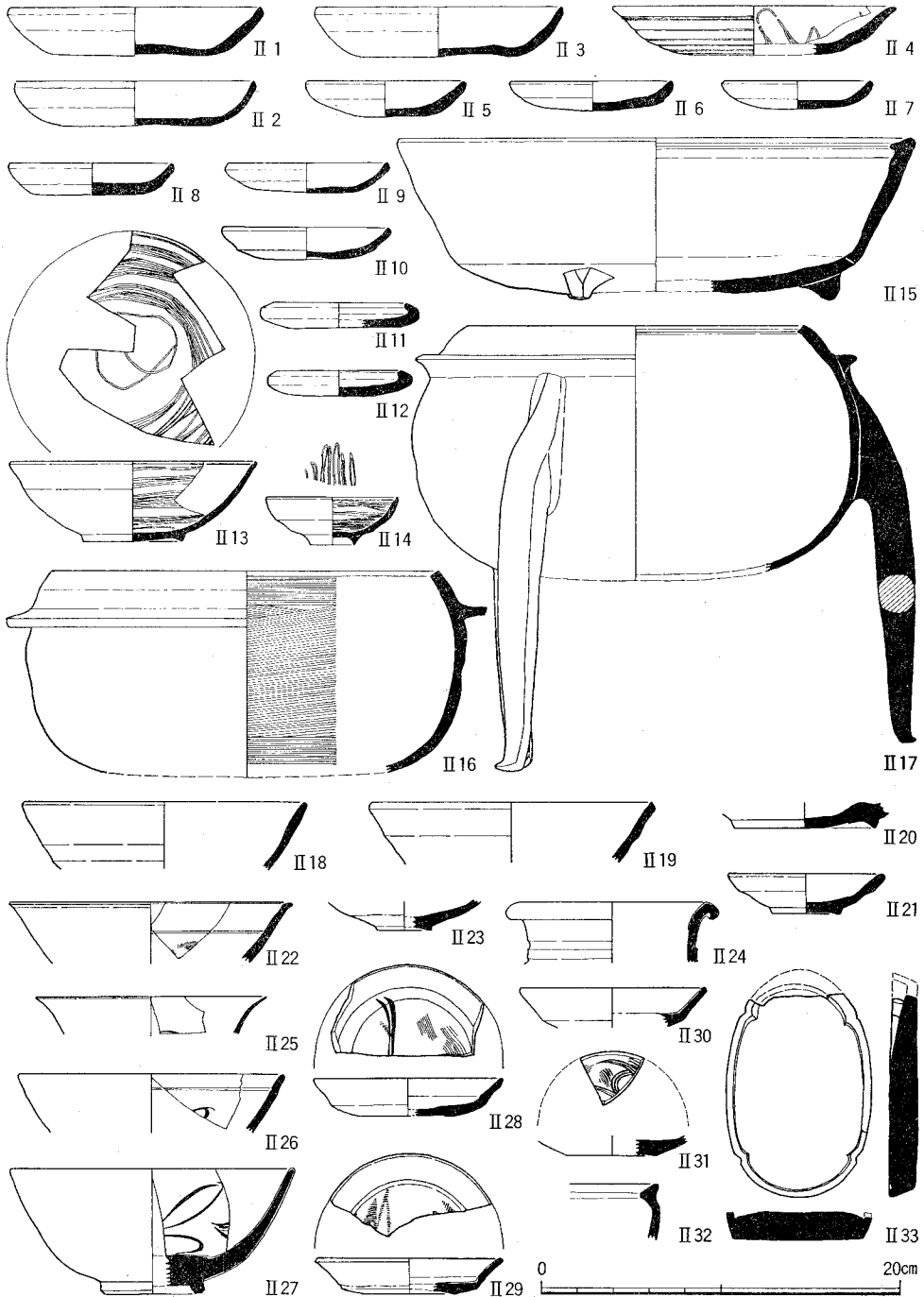


図14 SE6出土遺物(II 1~II 12土師器, II 13~II 17瓦器, II 18~II 21灰釉系陶器, II 22~II 24白磁, II 25青白磁, II 26~II 31青磁, II 32褐釉陶器, II 33石製硯)

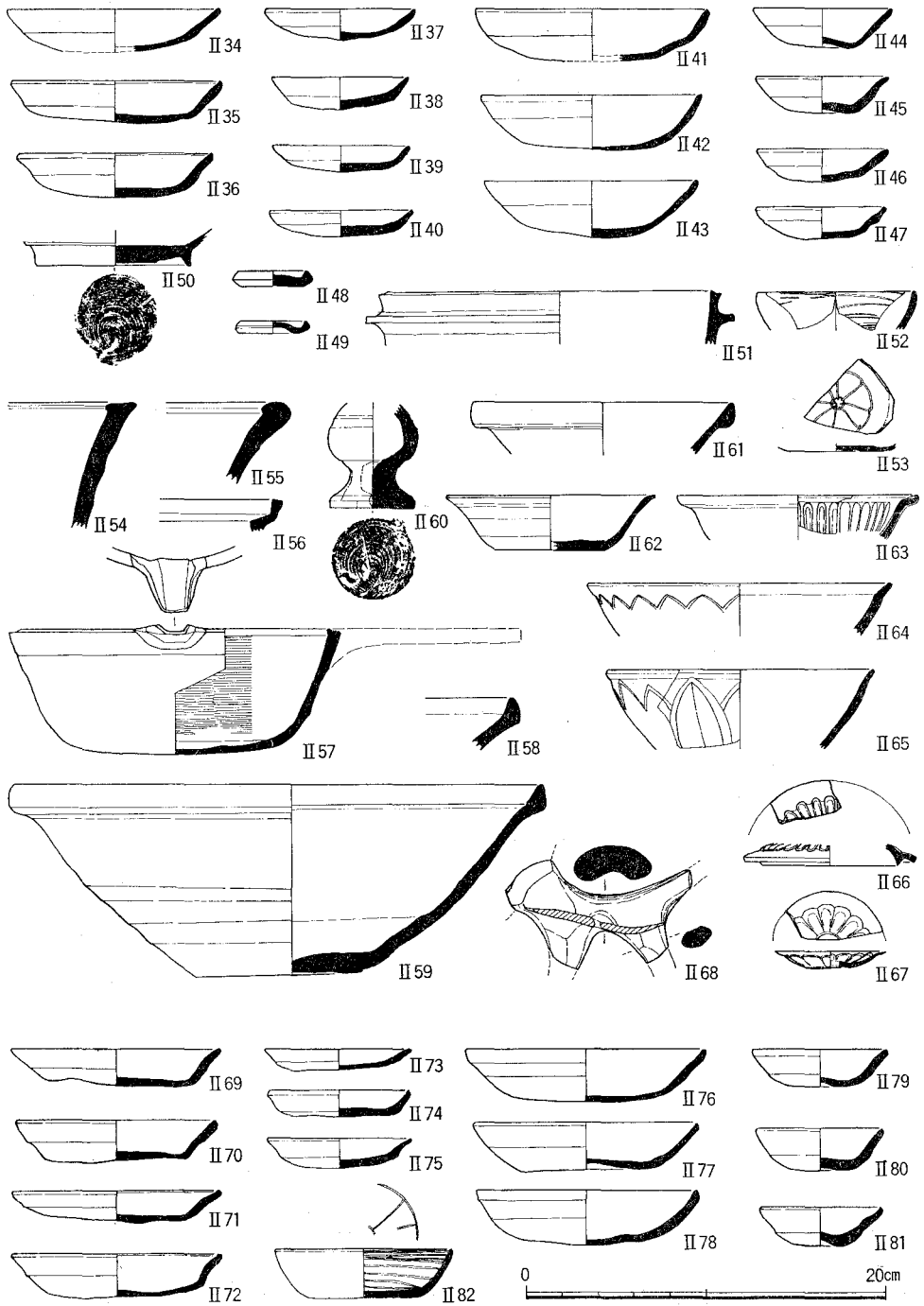


图15 S E 3 出土遺物(II 34~II 50土師器, II 51~II 57瓦器, II 58・II 59須惠器, II 60瀬戸, II 61・II 62白磁, II 63~II 65青磁, II 65・II 67青白磁, II 68土馬), S K I 出土遺物(II 69~II 81土師器, II 82瓦器)

が相半ばする。これらの特徴は、白河北殿北辺の調査 S D 13 出土例(平安京Ⅳ期新段階)と S D 11 上層出土例(中世京都Ⅰ期中段階)と比べると、口径分布は S D 13 に近く、口縁部形態は S D 11 上層に似る〔宇野 81 pp. 68-71〕。よって本資料は中世京都Ⅰ期古段階の土師器といえ、157.5 個体分と総量も多く、当期の基準資料になりうる。Ⅱ 11・Ⅱ 12 は受皿。

瓦器 碗(Ⅱ 13)は口縁内面に沈線を有し、内面の暗文はやや間隔があいて見込みには同心円状の暗文をもつ。橋本久和のいうⅢ-Ⅰの碗にあたる〔橋本 80 p. 90〕。ほかに、第Ⅱ期の特徴をもつ小碗(Ⅱ 14)、三足付き盤(Ⅱ 15)、三足付きの羽釜Ⅰ a 類(Ⅱ 17)〔宇野 81 p. 77〕、羽釜Ⅰ b 類(Ⅱ 16)などが出土している。

灰釉系陶器 碗には体部が直線的にひらくⅡ 18 と、やや内彎気味のⅡ 19 の 2 種がある。Ⅱ 20 は碗の高台部で、Ⅱ 18 とともにⅡ 19 より古い様相をもつ。Ⅱ 21 は底部篋切りの皿。

中国製陶磁器 Ⅱ 22～Ⅱ 24 は白磁。Ⅱ 22 は口縁部が「く」の字状に短く外反し、内面に沈線と櫛描文をもつ碗、Ⅱ 23 はやや上げ底の底部に内彎する体部がつく皿、Ⅱ 24 は壺の口縁部である。Ⅱ 25 は内面有文の青白磁碗で、薄手に仕上げている。Ⅱ 26・Ⅱ 27・Ⅱ 31 は龍泉窯系の青磁で、Ⅱ 26・Ⅱ 27 は割花文碗、Ⅱ 31 は櫛描花文皿である。Ⅱ 28～Ⅱ 30 は同安窯系皿で、Ⅱ 28・Ⅱ 29 には櫛描雷光文、x 字文がある。Ⅱ 32 は褐釉陶器の鉢である。

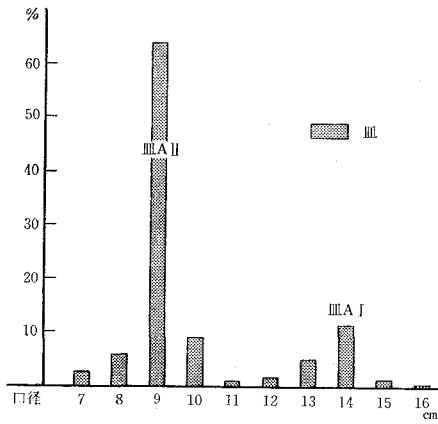
その他、Ⅱ 4 は外面に多条沈線文、内面にジグザグ状暗文を施す皿で、胎土は砂粒が多く、内面は黒色を呈する。Ⅱ 33 は四葉形の石製硯で、この種の硯としては古い例である。

S E 3 (図版 9, 図 15) 出土遺物は口縁部計測法による 88.9 個体分で、そのうち 62 個体分は試掘調査時に S E 1 として取上げた分である〔泉・浜崎 81 p. 38〕。

土師器 皿 A Ⅰ の口径分布は 12cm をピークとし、11cm と 13cm も多い(表 2)。口縁部形態はⅠ段撫で手法 E₂ 類(Ⅱ 35・Ⅱ 36)が最も多く、E₁ 類(Ⅱ 34)がそれに次ぐ。皿 A Ⅱ は口径 8cm を主とし、9cm のものも少なくない。口縁部形態は皿 A Ⅰ と異なり、E₁ 類(Ⅱ 37～Ⅱ 39)が主で、E₂ 類(Ⅱ 40)は少ない。碗 A Ⅰ は口径 12cm をピークとし、11cm がそれに次ぎ、口縁部形態は E₁ 類(Ⅱ 41～Ⅱ 43)が主である。碗 A Ⅱ では口径 7cm と 8cm のものが多く、口縁部形態は E₁ 類(Ⅱ 44・Ⅱ 45)と E₂ 類(Ⅱ 46・Ⅱ 47)が相半ばする。赤褐色を呈する皿と灰白色を呈する碗の個体数比は 3 : 2 である。以上の特徴は、白河北殿北辺の調査 S D 06 出土例(中世京都Ⅰ期新段階)と S K 10 出土例(中世京都Ⅱ期中段階)の特徴の中間に位置付けられ、中世京都Ⅱ期古段階の良好な資料である。Ⅱ 48・Ⅱ 49 は灰白色の受皿で、かなり小型化している。Ⅱ 50 は底部に糸切り痕を残す高台付皿で、焼成は堅緻である。

瓦器 小型碗(Ⅱ 52・Ⅱ 53)は、本部構内 A X 28 区出土例と比べて(図 7 Ⅰ 33 p. 12),

表1 SE6 出土遺物



規格別口縁部形態の比率

	皿A I	皿A II	椀A I	椀A II
個体数	32.6	120.3	0.9	0.3
C ₃ 類	1.4%	0.7%	—	—
D ₃ 類	12.8%	42.8%	—	100%
D ₅ 類	80.5%	56.0%	19.0%	—
D ₆ 類	3.6%	0.5%	—	—
E ₁ 類	1.7%	—	81.0%	—
E ₂ 類	—	—	—	—
合計	100%	100%	100%	100%

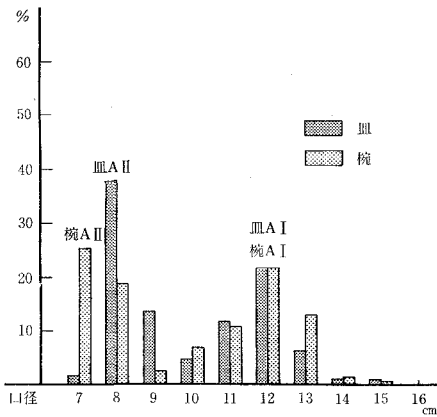
種類別の比率

出土総個体数
163.7個体

種類別比率

- 土師器 96.2%
- 瓦器 2.8%
- 須恵器 0.0%
- 灰釉系陶器 0.5%
- 中国製陶磁器 0.5%

表2 SE3 出土遺物



規格別口縁部形態の比率

	皿A I	皿A II	椀A I	椀A II
個体数	22.7	27.7	19.0	16.3
C ₃ 類	—	—	—	—
D ₃ 類	0.9%	—	—	1.0%
D ₅ 類	—	—	—	—
D ₆ 類	2.9%	8.7%	25.7%	6.2%
E ₁ 類	31.4%	70.5%	62.2%	52.8%
E ₂ 類	64.8%	20.8%	12.1%	40.0%
合計	100%	100%	100%	100%

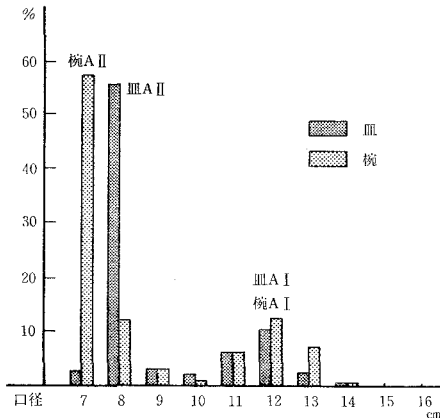
種類別の比率

出土総個体数
26.9個体

種類別比率

- 土師器 92.8%
- 瓦器 0.9%
- 須恵器 3.5%
- 灰釉系陶器 1.1%
- 中国製陶磁器 1.7%

表3 SK1 出土遺物



規格別口縁部形態の比率

	皿A I	皿A II	椀A I	椀A II
個体数	15.9	55.8	5.8	15.3
C ₃ 類	—	—	—	—
D ₃ 類	—	—	—	—
D ₅ 類	—	—	—	—
D ₆ 類	5.2%	—	2.2%	10.1%
E ₁ 類	59.7%	88.3%	85.5%	69.1%
E ₂ 類	35.1%	11.7%	12.3%	20.8%
合計	100%	100%	100%	100%

種類別の比率

出土総個体数
95.8個体

種類別比率

- 土師器 98.7%
- 瓦器 1.3%
- 須恵器 0.0%
- 灰釉系陶器 0.0%
- 中国製陶磁器 0.0%

見込みの菊花文が硬化している。碗以外に羽釜 2 類(Ⅱ51)、盤(Ⅱ54・Ⅱ55)、鍋(Ⅱ56)、把手付き鍋(Ⅱ57)などの器種が出土している。

須恵器・灰釉系陶器 Ⅱ58・Ⅱ59は須恵器すり鉢 4 類で〔宇野81p.78〕、Ⅱ60は黄緑色の釉がつく瀬戸の仏花瓶である。内側底面はやや凹み、中空脚部の名残りをとどめている。

中国製陶磁器 Ⅱ61・Ⅱ62は白磁で、Ⅱ61は玉縁口縁の碗、Ⅱ62は口禿の皿である。Ⅱ63～Ⅱ65は龍泉窯系の青磁で、Ⅱ63が内面に菊花文をもつ杯、Ⅱ64・Ⅱ65は蓮弁文碗である。Ⅱ66・Ⅱ67は青白磁で、ともに印刻の菊花文を有し、Ⅱ66は蓋、Ⅱ67は小皿である。

Ⅱ68は土馬の体部で、脚部取付きの形態と体部の長さことから、小笠原好彦のいう第Ⅱ期 G 型式にあたり、9 世紀前半ごろの土馬と思われる〔小笠原75 pp.39-41〕。

SK 1 (図15) 出土遺物は口縁部計測法による 95.8 個体分で、瓦器小碗(Ⅱ82)を除き、残りの 98.7% は土師器の皿・碗類であった。皿と碗の口径分布は SE 3 と類似するが、碗 A Ⅱの口径が小さくなる(表3)。一方、口縁部形態は、E₁類(Ⅱ69・Ⅱ70・Ⅱ73・Ⅱ76・Ⅱ77・Ⅱ79・Ⅱ80)の比率がやや増加して、E₂類(Ⅱ71・Ⅱ72・Ⅱ74・Ⅱ75・Ⅱ78・Ⅱ81)が少なくなっている。中世京都Ⅱ期古段階でも新相の資料であろう。

5 小 結

調査区の北に隣接した AP 22 区で現在 1,716 m² を発掘調査中であり(図版 1-111)、本調査区検出の遺構の解釈については、その成果とあわせておこなうことにし、本節では出土遺物についてまとめる。本調査で得られた SE 6 と SE 3 の資料は、一括資料の乏しかった中世京都Ⅰ期古段階と中世京都Ⅱ期古段階を埋める資料である。その結果、土師器皿の分類では、SE 3 や SK 1 出土例でみる限り、E₁類→E₂類という従来の考え方ではなく、口縁端部の処理では D₆類に近い E₂類が皿 A Ⅰでは先に出現することを明らかにできた。E₁類は皿 A Ⅱに用いられる手法として発達したものであろう。また、中国製陶磁器の組成変化では、明らかにしえた点が多い。SE 6 出土遺物から、遅くとも 13 世紀前葉には白磁外反口縁碗、龍泉窯系劃花文碗、同安窯系青磁皿とが主であったことが判明した。また、本部構内 A X 28 区の調査では 13 世紀中葉に龍泉窯系蓮弁文青磁碗がそれに加わることが明らかになっており(図 7 SK 51 出土遺物 p.12)、本調査区の SE 3 出土遺物から、14 世紀前葉に白磁口禿皿と龍泉窯系明緑色青磁蓮弁文碗・外反口縁杯・洗などを主とした組成に変わることが新たに判明した。この組成変化の年代観は北九州地方の編年〔横田・森田78〕よりかなり新しいものであり、今後検討を要する問題と思われる。

なお、出土遺物については京都大学文学部助手宇野隆夫氏に多くの御教示を賜った。